

1989.7.30



最近の記録を見る
むくげの会ゲストデイ「朝鮮――よもやま話」に来てください
つてはいる。大阪外大

たことを憶んでいる。しかし先生は「このような」とを聞きつけ
れば、きっと、いつもの優しい顔で「そんなことは、ないです。
よ。」と言われることだろう。

『むくげ通信』の百号（87年1月）のとき、梶村先生はつぎ
のようないふせーじを寄せて下さった。

「とにかくむくげに限っては、まずまちがうことはない、
という安心感があるのは事実で、むりに「苦言」をひっぱ
り出そうとしてもかえって不自然なものになりそうです。
たまには冒険をしてもいいのではと……（中略）とにかく、

全体の時代思潮が陥
悪になっていくとす
れば、それに抗うで
しそうが、かえって
ふつうのことを続け
ることが、いちばんの
冒険なのかもしま
せん。」

の集中講座の折に、強引に来ていただいたものだ。

六月一日、東京都中野区宝仙寺で行なわれた葬儀には先生を
懽んで多くの方が参列され、弔辞もそれぞれ心を打たれるもの
であった。最後の親族のご挨拶のなかに、昨夏の入院のとき小
さな病院であった故か、病氣の発見が遅れたことを悔まれ、せ
めて、発見が早ければ長く生きられなかつたにしても自分自身
の仕事を整理することができたのではないか、という趣旨の言
葉があつた。

梶村先生は晩年、特に自身の身を削るよう仕事をされた。
それも一人の市民として、外資法改正運動など様々な活動に参
加された。自身の学問的成果を集大成することも先生に要請さ
れていたが、自分自身のために時間を費やす余裕を私たちが与
えなかつたこともあつただらうし、また、先生自身も「象牙の
塔」に籠ることもできなかつたのだと思う。逝かれてから、先
生のお書きになつた論文の数に比べ、意外に単行本が少ないこ
とに気がつき、「整理の時間」を梶村先生もほしかつただらう
になあと考えた。

残された私たちは、と考えることがある。私たち自身がすべ
きこと、しなければならないことをする他ないのだろう。それ
が、先生の残された仕事のほんの一部にでもなればうれしいと
思う。またまた、梶村先生の「それでいいんじゃないですか」と
いう優しい声が聞こえそうだ。先生のように仲間にに対する優し
さを持ち続けて、歩んでゆきたいと思う。

1989.7.30

むくげ通信 115号 (25)

追悼 梶村秀樹先生

飛田 雄一

去る五月二九日、私たちは梶村秀樹先生を失つた。先生は世界的にも著名な朝鮮史の研究者として学会をリードされ、同時に絶えず自分自身を現在の南北朝鮮、あるいは在日朝鮮人の状況の中におき、一人の市民として運動に参加された。先生の働きが研究分野においても活動の分野においても広範囲であつたために、先生を失つたわれわれの痛手はあまりにも大きい。

梶村先生は、むくげの会の夏期合宿に講師として参加して下さいたことがある。記録をみるとそれは、一九七四年八月のことで、もう十五年もまえのことになる。一泊二日の合宿の内容は非常に欲張ったものだったが、先生は私たちの無理な要求をよく聞いて下さつたと思う。テーマは、①李朝末期朝鮮における資本主義萌芽の問題、②3・1運動以後の朝鮮民族解放闘争、③解放後の朝鮮——一九四五～五〇——の三つだった。当時、問題になっていたことを直接、梶村先生からお話しを聞いたかつたのである。（①は、「むくげ通信」26号に、③は、同27号に要約が掲載されている。）

むくげの会の「学術」的な最初の仕事は、訳書『朝鮮近代社会経済史』（78年、龍溪書舎刊）を出版したことであるが、これ

には「監訳」にあたるのだが、先生は細かい点まで目を通され、おそらく私たち訳者以上に時間を費やされただろうとおもう。私は、梶村先生の講演を、何回も聞いている。先生は、アジアティマーではないようだ。正直言つて、聞いていて「わくわくする」というようなことはない。どちらかいうと、淡淡とたいへんなくらいだ。最初のころ、梶村先生のものごとの雰囲気やかな講演と、厳しい主張を貫かれる文章との「ギャップ」に驚いたりもした。

何年か前、神戸学生青年センターで開かれた朝鮮史セミナーでの講演「解放後の在日朝鮮人運動」を記録としてまとめていたとき、先生の講演と文章との「ギャップ」は、なんら「ギャップ」でないことがわかつた。講演をそのまままとめる、原則を厳しく貫かれる梶村先生の文章になつたのである。もちろん先生は忙しい中、再び原資料にあたり、注などを付ける作業もしてくださいつて本はできあがつたのであるが、講演のときの先生の「穏やかさ」は、先生の後輩に対する、あるいは仲間に對する優しさであったのだ。

無理なお願いも、また、時間がかかるが梶村先生でないとできないような精致な作業も、いやな顔もせずに引き受けってくれた先生だった。梶村先生が亡くなられてから、先生に甘えてい

は一九五九年に朝鮮民主主義人民共和国で出版された「一九世紀後半期—日帝統治期の朝鮮社会経済史」の翻訳であった。

「梶村秀樹・むくげの会訳」となっている。當時、私たちは先輩の佐久間さんに相談しながら、与えられた章を、唯々辞書を引しながら朝鮮語を日本語に写していた。梶村先生は一般的には「監訳」にあたるのだが、先生は細かい点まで目を通され、おそらく私たち訳者以上に時間を費やされただろうとおもう。

私は、梶村先生の講演を、何回も聞いている。先生は、アジア

ティマーではないようだ。正直言つて、聞いていて「わくわくする」というようなことはない。どちらかいうと、淡淡とたいへんなくらいだ。最初のころ、梶村先生のものごとの雰囲気やかな講演と、厳しい主張を貫かれる文章との「ギャップ」に驚いたりもした。

何年か前、神戸学生青年センターで開かれた朝鮮史セミナーでの講演「解放後の在日朝鮮人運動」を記録としてまとめていたとき、先生の講演と文章との「ギャップ」は、なんら「ギャップ」でないことがわかつた。講演をそのまままとめる、原則を厳しく貫かれる梶村先生の文章になつたのである。もちろん先生は忙しい中、再び原資料にあたり、注などを付ける作業もしてくださいつて本はできあがつたのであるが、講演のときの先生の「穏やかさ」は、先生の後輩に対する、あるいは仲間に對する優しさであったのだ。

無理なお願いも、また、時間がかかるが梶村先生でないとできないような精致な作業も、いやな顔もせずに引き受けてくれた先生だった。梶村先生が亡くなられてから、先生に甘えてい